

地域社会における青年（ローターアクター）の役割についての提言

第369地区では、先に「ローターアクターの意識調査報告」（「友ニュース」1974年12月号参照）を刊行しましたが、このほど「地域社会における青年（ローターアクター）の役割についての提言」を刊行しました。第369地区にローターアクトクラブが創設されて5周年を迎え

たのを機に、ローターアクトの諸君から日頃感ずるところを提言してもらい、これからの指針とすべくまとめたものです。

寄せられた83編のうち、ここでは10編を掲載させていただきます。

第369地区ローターアクト 地区代表 曾根川 文 平

テーマに基づいて考えてみる時、まず出て来る素朴な疑問がある。それはローターアクトとは何であろうか？ということである。そこで、最初にこのローターアクトとは？について簡単にのべてみる。

まずローターアクトクラブの概況とその発生であるがローターアクトとは、奉仕と国際理解に関心を持つ青年の世界的団体である。

1968年「人間の考えることは、滅多にはじっと留っていない」という国際ロータリーの基本的な考えに立って米国ノース・カロライナ州ノース・シャーロットに世界最初のローターアクトクラブが生まれた。以来世界各国に急速に拡大し、1973年の資料に基づく、1200以上のクラブが56カ国に設立され、22,000以上の会員を有している。ローターアクトの諸関係についてのあらましをいうと、ローターアクトは内部的には提唱ロータリークラブ・外部的にはロータリー外の世界という複合した関係の中央・中心に立っている。この二つの関係はそれぞれローターアクトクラブの運営に関連を持っている。この詳細については、国際ロータリーパンフレット6117-Jに詳しく記載されているので、省略させていただきます。

次にローターアクトの目的であるが、それはあらゆる職業において高い道徳的基準を受尊重重するよう奨励し地域社会に対する奉仕を通じて指導力を養成し、責任ある市民精神を育成すると共に、国際理解と平和とを促進することにある。そして具体的目標として、8つの項目を掲げているのである。この8つの項目については、ロー

ターアクターはすでによく知っておられることと思う。ここで、私が地区代表という立場に立ってローターアクトとしてのビジョンを考える時、それはまずローターアクトの会員自身の意識の向上を計ることから始まると思う。会員一人一人が、ローターアクトというものをよく勉強してもらい、よく理解してもらうことができれば、ビジョンは自ずから鮮やかに描き出されると思う。しかしながら現在我々アクターが奉仕することの重大さと奥深さを果たしてどこまで認識しかつ実践しているであろうか？誠に恥しいことではあるが、勉強不足で余りにも煩惱の中に生活する私自身こそ、目をそらさず自問し反省しなければならぬことである。

さて、そこで少し脇道にそれるがもっと基本的な青年の思想について考えてみる必要があるように思うのでのべてみる。われわれ青年思想の構成は、まずマクロ的見地に立って、たえず展望を大きくするように努めなければならないように思う。そこから地域社会というものを展望し、われわれ青年の役割を見つけ出すべきであろう。しかし、それがいわゆる青年の大言壮語になってしまつて、足が地につかないのでは困る。だから、その展望は具体的かつ明確なものに立脚しなければなるまい。ローターアクトクラブを構成する18歳から28歳という年代は、そういう意味において、非常に大切な時期であるように思う。

なぜならその年代で培われた思想・精神が、その一生を左右する社会基本的なものに確実になると思われるからである。そして、20年、30年後の社会が、また確実にこれらの青年によって動かされるようになるわけだ。

戦後30年たった今、日本は繁栄の極みに立っている。これから先一体何が起るのやら、どういうふうに変るのやら全く予想もつかない状態の中で、われわれ青年はし

っかりと目を見開らいて、自分たちの地域社会をより立派な素晴らしいものにして行かなくてはならないのである。

そのためには小さなカラの中で閉じこもることなく、ローターアクトの名にふさわしいようにアクションを起こさなくてはならない。この一番充実した年代を、エネルギーにダイナミックに動きまわらなくてはならない。

かけがえのない青春ノはちきれるばかりの若さは、何ものにも変えがたい素晴らしいものなのだから。

以上が、私のローターアクトクラブに寄せる期待である。国際ロータリー第369地区アクター諸君、共に奮起しようではないか!!

<広島北R・A・C>

防府南RAC 佐々木 広 三

私がローターアクトのことを知ったのは、ごく最近であります。会社の女子寮の舎監が、「佐々木ちょっと話がある」と声をかけられ初めてローターアクトのことを知ったのです。またその日はちょうど例会があるということで、見学のつもりで参加しました。

初めての例会に参加して、会長始め、会員全員が奉仕活動について活発に討議しているのに対し、私は心の底から感激したのです。

私がローターアクトに興味をもちだしたのはそれからのことでした。その時は、一生に一度でもいい「人のためになることをしよう」と決心したのです。

実をいいますと、私の家庭は、私が中学校のころまで社会保護を受けておりました。

思えば、私が小学校一年の時のことでありました。ある日、父は朝元気に会社に出勤しました。その日のちょうど正午ごろだったと思います。会社の人が家へ来て、「お父さんが怪我をされた」と連絡してきたのです。母はその話を聞いてがっかりしているようでした。

その後母は父のかわりに働き始めました。でも身体の弱い母でしたから、そう長くは続きませんでした。母も過勞で倒れてしまったのです。

それからというもの、私達兄弟は知人の家で暮らすことになったのです。でも他人の家ですから、愛情というものとは全くといってよいほどありませんでした。そのころちょうど私は小学校一年、兄は小学校四年でした。着るものも満足に買えず継ぎあてのものを、毎日毎日着ていったのを今でもはっきり憶えています。でも貧しいか

ら仕方がないんだと思うと、恥かしさも苦にならなかったものです。しかし、「貧しいから……」と思っているも、解決出来ないものがありました。それは、学校の給食費を持っていけなかったことです。金を出さずに給食を食べるということは、いくら幼なかつた私でもできるはずがありませんでした。だから先生に給食をやめるといったことがあります。その時先生は、「じゃあ弁当はどうするの？」と私に聞き返したのです。私は思わず答えました。「弁当を持ってくる」と。

それからというもの、麦飯弁当を持っていったものです。勿論私一人が弁当ということのコンプレックスは持っていましたが、これだけはどうにもなりませんでした。また時々、友達から意地悪を言われましたが、その時は山へ登って弁当を食べたものです。多分兄は私以上に苦勞したのでしょう。兄は小学二年から新聞配達をして家計を助けていたから、私もいっしょになってよく手伝ったものです。

母は一年で退院しましたが、真っ先に私達を迎えに来てくれた時は嬉しくて泣いても泣ききれなかつたのです。またその時母の言ったことは、「もう離さないからね」という一言でした。

以上私の体験談を簡単に書きましたが、今はそれはよき思い出として脳裏に深く残っているのです。

「奉仕」それは、私に全く関係ないということはないのです。着るものがない時には古着も多くの人からもらいましたので……。

ローターアクトの役割といっても非常に難しく、私自身にもよく解らないのが現状です。でも私は人のために尽くさねばなりません。献身的態度で。

また、人生の先輩として、そしてよき指導者として青少年の成長を側面から援助することによって「時代の流れ」を克服できるのではないのでしょうか。

防府南RAC 吉 光 朱 実

私は困ってしまいました。今までに、「地域社会における青年の役割について」なんてことを、別に考えたことがなかつたからです。一体何をすればいいのでしょうか。私は今までに、青年として何をしてきたのでしょうか。私は困ってしまい、あるローターアクターの人とその事について話しました。するとその人は、「あなたは、あなたの仕事に対して使命感を感じていないのか。もし感じているのなら書けるはずだ。」と助言して下さいました。

私は正直なところ、今まで自分の仕事に対して、使命感というおおげさなものは、感じていませんでした。

私の職業は、幼稚園教諭です。

私はただ、自分が好きで、お給料は安くても、生きがいのある、そしてやりがいのある仕事だとしか考えていませんでした。

はじめて大勢の子どもたちの前に立った時に、足がすくんでしまったこと、私の教えた歌を子どもたちが帰り道にうたってくれていた時の何ともいえない喜び、失敗した時の苦い経験、そして子どもたちが私のもとから巣立っていった時の喜びと寂しさで、オイオイ涙を流したことが、まだまだ沢山の思い出があります。

でもみんな目の前を通り過ぎていった風のようにです。私は子どもたちにどんなことをしてやれたらだろうか、そして子どもたちは私からどんなことを学びとってくれたらだろうか、私にはわかりません。ただ私は、どの子も皆心のやさしい人であってほしいと願っていることだけです。公園の花を平気で折ったり、約束を破ったり、人に迷惑をかけたりするような“ひと”にだけはなってほしくない。

“そうだ！”私にできることは、私のすぐ側にいる子どもたちの心に、やさしさと道徳心という芽をのぼしてやることではないだろうか。

それはとてつもない大きな夢であり、それはすごく難しい私の役割であり、私の奉仕活動であると思います。すべての子どもが、私の願っているようなやさしさと、ほんの一握りの道徳心をもってくれることを私は望みます。

では、どうすれば子どもたちの心の中にあるやさしさと、道徳心を芽ばえさせることができるのでしょうか。

私は考えました。何だろう、何だろうと。

ある雨上がりの日、先生方と一緒に園庭の草取りをしていました。すると、子どもたちが、一人、また一人と私たちの側に寄ってきてはしゃがんで見えています。

「せんせい、どうして草取りするの？かわいそうだよ。」と、その中の一人の子が言いました。私はその子どもの素朴な問いに内心、ギクリとしました。「何と言ったらいいんだろう。」心の中で、あれこれ子どもに説明する言葉をさがしました。そして、こんな話を思い出したのです。

あるおかあさんが草取りをしていると、やはり子どもが今のような問いかけをしてきました。するとおかあさんは、一本の草を取りその草に「草さん、ここに生きてきては困るんですよ。今度生えてくる時は、取られないように山に生きていらっしゃいね。」と言って草取りを

されたということです。

私はその言葉を拝借して子どもに言いました。すると「せんせい、山に返してやるんだね。ぼくも手伝ってあげるよ。」と言って、小さな手を泥だらけにして草取りをしてくれました。

子どもの本当に小さな問いかけの中にも、子どもの心の中にある『やさしさ』があるのだなとつくづく思いました。そしてまた、その問いかけに、思いやりをもって答えるのが、私の務めだとも思いました。

私はやっと気付いたのです。

子どもたちにやさしさと、道徳心を芽ばえさせることは、私自身の思いやりと私の後ろ姿だということに。

私は私の与えることのできる、すべてのものを子どもたちに与えたい。それによって、少しでも子どもたちの心に、“やさしさ”と“道徳心”という「ともしび」を燈すことができたなら、一教師として、また、一青年としてこの上もない喜びを感じることでしょう。

今の私にできることは、ただ、これだけです。

浜田RAC 小林 美 絵

浜田ローターアクトクラブは、まだ認証式も済ませていない、生まれたばかりのクラブです。したがって、お互いの気持ちがわからない位ですから、本当は今、ローターアクトクラブのことは書けないのですが、とにかく、私個人の意見をのべてみます。

ローターアクターだから——すべきだとか、——せねばならないというのは、とてもきゅうくつな話です。ローターアクターだからといって、片ひじ張ることはない、でもクラブに所属している限り自覚は持っていよう、これこれが私の今の気持ちです。

そもそも、この団体に加わったのは、何かをする時は仲間の方が良いに決っている、という単純な理由からです。仲間同士で協力して何か事に当たるにつれて、連帯感も生まれるでしょう。今現在の浜田ローターアクター達には、その過程が大切であって、結果は、たとえ、それが思い通りにゆかなかったとしても、大した問題ではないのです。この一年間は、特別な活動を望む前に、会員の心をつなぐことが必要です。まず礎を作ることに、全員がこれに全力を注ぐ年になると思います。

以上にのべたことからすれば、私達は消極的で、無気力にみえるかも知れません。しかし、長い目でみてほしいのです。おそらく会員は、それぞれに抱負を持って

いることでしょう。

以前、私達は「小さな親切」という言葉をよく耳にしました。これは求めることばかりで、与えることを忘れてしまった現代の風潮の中で、大きな意味を持った呼びかけではないでしょうか。

「親切は、社会をつなぎ合わせている金の鎖である。」これはゲーテの言葉です。私が、親切にすることを取りあげたのは、それが誰にでも簡単にできることからです。

その上、万国共通の行為です。これから、国際奉仕委員として活動する時も、自然な、素直な思いやりを反映させたいと考えています。

防府南RAC 古賀 隆 一

現代社会の中で「人間疎外」という問題がよく取り上げられます。職場で働く人々も学校に通っている人々もそして家庭にいる人々も何らかの形でこの「人間疎外」をあげわっていると思います。

「人間疎外」とは、人間が自己自身を一人の異邦人として経験する一つの経験の仕方であり、人間が自己自身から離され、疎遠化されることです。つまり人は自己をその世界の中心と考えることができず、また自己をその行為の創始者とみなすことができず、反対に自己の行為とその結果とをあたかも主人とみなし、それに従っているのです。疎外された人間は、他人とふれあい、一致しあうことがないばかりでなく、自己自身にふれたり、一致したりすることがありません。そして、その人々は分離感・孤独感をあげわり、不安感にさいなまれるのです。

流れ作業の中で働く人間は機械の動くままに労働しなければならぬという現実、百名以上でのマスプロ教育が行なわれている現実はその良き例の一部でしょう。

かくのごとき状況認識の上になつて、われわれローターアクターはその地域社会において「人間疎外」を克服すべく何らかの行動を起こさなければならないことは、ローターアクトの「愛と奉仕の精神」からいって当然のことでありましょう。

とは言ってもそれでは「愛と奉仕の精神」とは何なのか。ローターアクターがその精神を理解していなかったら、何の行動もあつたものではないでしょう。

「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。」「大凡菩提心の行願には是の如くの道理静かに思惟すべし、

卒爾にすること勿れ、済度摂受に一切衆生皆化を被ぶらん功德を礼拝恭敬すべし。」

自分と同じように他人を愛する。自分のことは二のつぎにして、まずすべてのものに幸せを与える。このような発想に少しでも、一刻もはやく自分達を近づけていくのが、まずわれわれに課せられた第一の使命ではないかと考えます。

そして、少しでもそういった発想の基盤の上になつたら、われわれは「対話」という武器をもって、「人間疎外」に挑戦していきたくと思います。

それでは「対話」とは、それは単なる相手との話し合いという意味ではなく、お互いがお互いを自己の全身全霊をもって理解し合い、高めあうことを意味するものです。われわれローターアクターは、日常の例会・理事会そして委員会活動、また特別活動を通して、まずは同じ基盤の上になつたローターアクター同士から「対話」を始め、やがては「対話」の輪をここ防府に住む、働く若者達の世界にひろげていきたいと思っています。

「対話」は、われわれに友情をもたらしてくれます。「対話」は、われわれに尊敬できる人を教えてくれます。そして、「対話」は、われわれに愛する人に出会う機会を与えてくれます。読書会結構、スポーツ大会結構、ディスカッション結構、ダンスパーティ結構、訪問結構、ありとあらゆる「対話の場」を求め、われわれはお互いの心の中に入っていく努力を積み重ねていくべきでしょう。

徳山RAC 戸崎 哲 男

私はローターアクトクラブ（以後RACとする）のビジョンというものを、平易な言葉でいうならば、まず広義においては“平和で豊かな国際社会の創造”であり、狭義においては“明るく住みよい地域社会の創造”ということであると考える。

以上のビジョンを実現していくために、まずもってわれわれ同世代にあつては、一日も早く、RACがリーダーシップをとらなければならないということ、現実の活動目標として掲げたいと考える。何故ならば、RACこそ最も多角的な視野に立ち、世界を、社会を、職業を通して考え、行動しているからである。

われわれRACは、奉仕と友愛という理念を掲げて諸活動を行なってきたが、まさにそこにこそリーダーシップに求められるべき自己開発、あるいは自己啓発がありさらには行動力があると考える。しかしながら、もっと

欲をいえば、リーダーシップに求められるべきことは、まず Best な認識、そして計画性、さらに行動力であると考え。今 Best な認識とのべたが、私のいう Best な認識というのは、例えていうならば、どこかの RAC においても社会奉仕委員会の諸活動の中に、老人ホームの慰問という活動を行なっているが、それは現実の問題として Good な活動である。すなわち、老人ホームにおられる方々には、RAC の慰問というものは喜ばれ、感謝されている。しかしながら、こういう場合後でよく耳にするのは、自分の子供や孫の顔がたまには見たいという老人の方々の願いである。個人の力には限界というものがある。そこで集団や組織というものが必要になってくる訳であるが、ここで、例えば訪問する前に、老人の方々の希望や夢などを調査し、可能な限り RAC がそれに尽くせば、また、老人の方々の家族の方に訪問の呼びかけを行なってみたらどうであろうか、あるいは家族の方々の便り、近況報告等を持参したらどうであろうか、あるいはこれよりもっと良い方法があるかも知れない。私はこのように、その活動において、常により良い方法はないか、より効果的な方法はないか、と考えながら行動していく、それが Better な活動であると考え。そしてさらに私がいう Best な活動であるが、…… 私達 RAC の奉仕と友愛の活動には、たとえ自己開発とか自己啓発などといっても、限界があるのは確かである。したがってそこで考えられることは、われわれ RAC の Good な、あるいは Better な活動を通して、その輪というものをより大きく広げていくことである。すなわち私達 RAC の会員が、その責務を自覚し、力を合わせ、そして私達同世代の域内諸団体と交流を重ね、そこに最大公約数的なビジョンを見出し、青年の若さと情熱と行動力で活動していくことが、明るく住みよい地域社会づくりの大きな発展へつながるものであると確信する。

しかしながら、ここでさらに考えねばならないことはその活動をより効果的ならしめるためには、われわれ青年を含めたすべての大人が、行政に対し敵視する態度が必要であるということ、全く抽象的ではあるが、一言つけ加えておきたい。

次に計画性ということであるが、Good, Better, Best へと向かう活動の過程において、現実的には Best な活動といっても、各 RAC 内部の力量（技術的、経済的、会員の RAC に対する認識等々）の問題があるであろうから、まず Best な活動を長期的目標として設定し、Good, Better な活動を、長期的目標を実現していくための短期的な目標として計画することが善策だと考える。このように、常に RAC の活動において、計画的に活動

していくことこそより実のあるものになり得ると考える。

以上のべてきたことを常に考えながら行動していき、RAC がわれわれ同世代におけるリーダーとなって、明るく住みよい地域社会が実現し、それがひいては、平和で豊かな国際社会の実現へとつながるものであると考える。

山口 RAC 上田 和子

他のクラブ員も同じことを考えていると思うのだが、活動と行動の方法は、毎日のようにわれわれを悩ませる、そして行き詰まりを感じる。その行き詰まりについて討論会でも開けたらいいのだが、現在、わがクラブでは、活動や行動について全体討議を余りしない。

だからではないけれど、私が日頃考えていることを書いてみたいと思う。

何をなすべきか、非常に難しい議題だと思う。突然に問われたら答えることができるだろうかと自分自身、不安に思うが、これは、ローターアクターとして毎日、肝に命じておくべき大切なことと考えるが、われわれは、各々のクラブで、また、その中の四つの委員会に分れて活動をすすめている。青年がすることは数え切れない程ある。しかし、数えきれない程ある中で何をやっていくか、何を目的としてやっていくかが問題になると思う。これは、個人的考えであるため、他に意見のある人は多いと思うがそれはそれで結構だと推察する。

では、実際には、何をすればよいのかということになるが、私は、自分達の納得の行く活動をすべきと思う。つまりクラブ員全員の賛成を得、十分な計画が立てられるそして協力のもとに、社会に奉仕できる。そしてそれは中途半端に終わってはならない。継続性のあるものが望まれる。だからといって、クラブの活動範囲が狭くなるのは、おかし。われわれは、若い。時には、規格をはみ出す位の、エネルギー、バイタリティーは、欲しい。そのためには、行動の方法を考えなくてはならない。

よく、ローターアクターらしく行動しろといわれる。ローターアクターらしくとはどういう行動のことであろうか。そしてまた、ロータリークラブがスポンサークラブであることを忘れてはならないともいわれる。そこがローターアクターなのだ、なんて半分理解できて半分どうしても納得できないところもあるが、前にのべたように活動には、継続性があり、それが何等かの形で社会に

役立つためにも、行動は、慎重に計画性を持って押し進めていくべきであろう。そして多くの意見を取り入れて行くことが、よりクラブの発展につながると考える。

小野田 RAC 井上 康彦

私はこのアンケートに対して、まったく書く気がなかった。というよりも答える必要がないと思った。自由カイホウのこの世の中で強制という事を耳にしたからである。このアンケートは、小野田 RAC の会長から強制であるから絶対に書きなさいと言われた。これではまったく、RAC の目的、目標などはちがった、ものになってしまう。

ロータリアンの行動テストの中に「誠実で建設的な行動か。」という質問があった。その場で何が誠実かといってやりたかったのだがこらえていた。もっと、RAC とは何かというものを、全国の RAC の人達は考えなおしてほしいと思う。私達若者には、二度と帰ってこない、青春というものがある。その日々を、こんなかってなロータリアンからの強制のためにつぶしているのかと思うと、いてもたってもいられなくなる。

小野田 RAC は、老人ホーム、孤児院などの奉仕にロータリアンの方が参加されたことは、まずない。私が RAC に入って、見たこともない。行動しているのが RAC で、あやつっているのが、ロータリアンでは頭にくる。二度と帰ってこない日々を返してくれというふうにさえ感じる。

しかし、福祉を通しての老人や孤児の人々の考え方、行動などは自分でもわかってきたつもりだ。また、わからされたような気がする。RAC に入ってよかったと思うが反面、ロータリアンには頭にくる。もっと実質的に RAC とともに行動してほしい。

小野田 RAC 藤井 洋子

アクターとなって、まだ日が浅く、アクトの活動もやっと、分りかけたところで、先輩に教えられついてゆくことで、せいっぱいです。今まで感じたことは、アクターが少なくて、活動ができにくいということです。まず、多くの人にローターアクトの存在を知ってもらい、やる気のある会員を増やすことに力を入れたらよいと思いま

す。
今までやってきた活動、たとえば、老人ホームの清掃孤児院の子供達との運動会、それらの施設のための募金活動など、その時は楽しくやったのですが、何かその人達に、押しつけている所があるのではないかと、かんじました。だから私としては、対象のないもの、自分のためにもなることをやりたいと思います。たとえば、町をきれいにすること、自分の住んでいる所が、きれいになるのは自分も気持ちいいし、他の人も住みよくなると思います。定期的に公園、道路などの清掃をしたり、廃品回収や募金などの収益金で、花を植えたり、木を増やしたりしたらよいと思います。これらのことは、長期的にやらないと効果がないと思います。しかし、実際にその活動をするとき、自分にできるのだろうか疑問です。その時間をどうしてあけるか。今までの活動でもやはり、日曜日などに出ることが多いので自分の時間が、もてなくなり。貴重な休日を、私的なことをやるには、活動を休まなければならないし、それでは、他のアクターにも悪いので、自分のことをやるべきか、活動をやるべきか悩みます。

本当のところ、このことが一番頭の痛いことです。皆様は、自分の時間アクターとしての時間の配分を、どのようになさっていらっしゃるのでしょうか。

広島北 RAC 元 広 真理子

ローターアクターとしての役割は、世にサービス精神を広めること、それには、人にいってやるのではなく、自ら、やって見せなければならない。

ところで、貴方は70歳までの生涯に、勉強その他に費やした年月を考えたことが、ありますか？。これは、米国の調査ですが、平均睡眠時間25年間、食事6年間、労働14年間、教育4年間、娯楽8年間、読書3年間、鏡の前で5年半、おしゃべり3年間、礼拝1年半だそうです。時は、どんどん過ぎ去っています。ぼやぼやしているのは、置いてきぼりに、されますよ!!

何かしなければ、そうです、私達は若いのです。何でも、始めようとする時は、勇気、不安で、胸がいっぱいに、なるかも知れませんが、やってみれば意外とこんなに、おもしろいものだったのかと、夢中になれるはずなのです。

さて、戦争を経験してきた年代の人達は、決して油断
(裏面へつづく)

してはならない、生活状況下にあつて、心のゆとりということが、全くなかつたといつても、過言ではないはずで、悲しいかな今だに、この緊張感、生活のすみずみに、反射条件として残つています。だから、今こそ必要なのだと思つます。若者の行動力が……。

今からの世の中、ユーモアのセンスと、自然を眺める余裕がなくて、心のゆとりは、生まれてこないのではないのでしょうか。それには、どうすれば良いのか？ユーモアのセンスこれすなわち、いろんな経験から生まれてくるのです。そう、若者ならば、何でもかじり、何でも吸収するのです。貧しい経験からは、何も見い出せない、いろんな人達との、心のふれあい、これが大切なのです。そして自然を眺める余裕、これは読んで字のごとく、自然に親しみ大らかな心を養ふこと、大いにロータ

リーをバックに、与えられたチャンスを手前に活用しようではありませんか。

第三者から見れば、奉仕活動をしている人達が、偽善者のように見えると聞きました。とても寂しいことです。事実そのようにならないように、したいものです。

ローターアクトを通じて、会員1人1人、奉仕の精神いわゆる心のゆとりが、自然に身につく、その上で、世界中の貧しい人、弱い人、みんな同じ様に、生きる権利があるのです。施すなんてナンセンスです、みんな共に、愛情を分かち合おうではないか!!

最後にローターアクトとして、何をなすべきか。つまり、世のため、自分のために生き甲斐を見出すこと。その手段が、ローターアクトであつた、それでいいのでは、ないでしょうか。